

【研究ノート】

不寛容社会を観察する／不寛容に観察する社会

赤堀 三郎*

日本では近年、不寛容が広がりつつあると言われている。不寛容社会という言葉が使われることもある。本論文は、社会が不寛容になっているか否かを検証したり、社会の不寛容さを道徳的・倫理的見地から嘆いたり非難したりするものではない。本論文で問うのは、不寛容社会が「どのように観察されているか」である。そしてこのことを通じて、近代化や文明化のもつパラドクシカルな性質を扱うための一般的な枠組を探究する。そのためにここでは、社会を一種の観察者として把握し、その観察の仕方を問う「セカンド・オーダーの観察」の視座に立つ。ここから、次のようなことが言える：

まず、社会の不寛容さは寛容／不寛容の区別を用いることで観察されており、その背景には「文明化した社会は寛容であるべきだ」という考えが隠されていることがわかる。

次に、社会学理論の知見をあてはめれば、不寛容さの蔓延は文明化に逆行するものではなく、むしろ文明化の当然の帰結であると言える。不寛容社会は文明化や「よりよい社会」の追求が往々にして正反対の結果をもたらすというパラドックスの一例として捉えることができ、この意味で注目値する。

そして、ニクラス・ルーマン『社会の社会』で論じられている「社会の自己記述」という循環的な図式を用いることで、この種のパラドクシカルな現象の発生メカニズムに接近することができる。

社会の望ましさを追求と密接に結びついた不寛容社会のような自己記述は、往々にして当初の目的に反する望ましくない帰結をもたらす。この種の問題に対処するとすれば、たとえば不寛容を現象の水準ではなく言説という水準で把握し、言説が逆機能をもたらす仕組みを解明して、そこに見られる悪循環の円環を断ち切ることがその処方箋となるだろう。

キーワード：セカンド・オーダーの観察、文明化の過程、自己記述

1 はじめに

「日本の社会学はどこまで時代の課題と取り組み、新時代にふさわしい解決策を出しえてきているであろうか？」（庄司 2016: 11）

本論文は、この問題提起に答えることを目指している。本論文の立場は、次のようなものである。

- 日本の社会学がなすべきことは、世界的な学術共同体への知的貢献である。
- 日本の社会学が「日本」を前面に出すとすれば、日本にかかわる何らかの特殊事例から出発

* 本学現代教養学部教授

しつつも、時代の課題や解決策といった普遍的な（つまり、日本に限らない）主題に関して、何らかの一般的な（つまり、世界に通用する）認識利得に至る道を示すべきである。

以上のような考えを実践するために、本論文では、2016 年ごろから日本で使われるようになっている不寛容社会という言葉を取り上げる。そしてこの言葉の使用に関してある種の社会学的観点を適用することによって、文明化や近代化全般を扱う道具づくり（理論枠組の探究）に関する普遍的な含意を引き出すことを目指す。

2 不寛容社会

2-1 不寛容社会の発見

不寛容社会という言葉を使うとはいっても、本論文の関心は、日本が以前と比べて不寛容になっているかどうか、どのように不寛容になっているか、不寛容がみられるのは日本だけかどうか、といったことを検証することにはない。その代わりに、まずは、不寛容社会とはどのような言葉か、社会の不寛容さがどのように語られているかといったことを概観する。

2016 年 6 月、NHK は「わたしたちのこれから～ # 不寛容社会」というタイトルの特別番組を放映した（『NHK スペシャル』、2016 年 6 月 11 日）。NHK のウェブサイトには、この番組の内容について次のように書かれている。

週刊誌の報道をきっかけに人気タレントに集中する批判。インターネットや SNS にあふれるバッシングや炎上。相いれない主張がエスカレートし、対立構造が先鋭化する社会に、息苦しさを覚えるという声が多く聞かれるようになった。専門家は、このままでは日本社会全体が萎縮してしまうと警鐘を鳴らす。なぜ、いま“不寛容な空気”が広がっているのか？冷静な議論のためには何が必要なのか？専門家や市民と共に徹底討論する。¹⁾

この番組では、NHK が独自に行った世論調査データに基づいて、「子どもの声はうるさいので、近所に保育園ができるのには反対だ」「大きな災害が起きたときは、インターネット上に、楽しそうな写真や文章を投稿するのは不謹慎だ」といった意見への賛否を問うていた。番組が「不寛容社会」という言葉で言い表そうとしたのは、他人の過ちや欠陥が許せないとする風潮である。それはインターネットないし SNS の普及によってもたらされたものであり、それ以前はそこまで大きな問題とはみなされてこなかったとも付け加えられている。

この番組の影響かどうかはわからないが、この翌年（2017 年）には「不寛容」という言葉を用いた書籍が立て続けに刊行されている。たとえば谷本（2017）、西田（2017）、森（2017）、真鍋（2017）がそれである。それぞれ内容は異なっているが、上述した「他人の過ちや欠陥が許せないとする風潮」を扱っているという点では共通している。

ここでは、これらの書籍に関して厳密にテキストマイニング等で分析を行ったわけではないが、一見しただけでも、不寛容とともに登場する言葉として「息苦しさ」、「インターネット」、「SNS」、「批判」、「バッシング」、「炎上」といったものが挙げられるだろう。これらの言葉は、先ほど引用した NHK の番組内容紹介でも用いられている。他には「感情的」、「攻撃的」など。不寛容社

会は、これらの語彙が示しているものと密接にかかわりをもっている。

2-2 不寛容社会へのセカンド・オーダーの観察

本論文は、社会の不寛容さをデータで検証したり、道徳的・倫理的見地から嘆いたり非難したりするものではない。その代わりに、セカンド・オーダーの観察という視点の導入によって、不寛容社会という時代診断が「別の意味で」興味を引く題材であることを示したい。

セカンド・オーダーの観察とはどのような立場か。その前に、まず、ファースト・オーダーの観察について、「社会が不寛容である」、「社会に不寛容さが広がっている」というのはファースト・オーダーの観察である。これに対して、(ファースト・オーダーの)観察を観察するのがセカンド・オーダーの観察である。たとえば、「誰が(何が)」、「どのように」、「何のために」を観察しているのかを問う。不寛容社会について言えば、「不寛容社会とは〈何か〉」がファースト・オーダーの問いだとすれば、「〈誰が〉、〈どのように〉、〈何のために〉不寛容社会を観察しているのか」を問うのがセカンド・オーダーの観察に相当する。

ここで、「誰が(何が)」観察しているのか、「誰が(何が)」観察者であるのか、という点が重要である。本論文で立脚する観点から見れば、観察者は具体的な人間ではなく、「社会システム」(social systems)である。ここで言う「観察者としての社会システム」がどのようなものであるかについては赤堀(2016)で詳しく述べたが、手短かにいえばそれは、何らかの意味をもつコミュニケーションであり、何らかの意味をもつ言葉である。

以上はニクラス・ルーマン流の社会学的システム理論に由来する考え方であるが、この理論の文脈においては、観察という言葉は「区別に基づく指し示し」を意味する。このように観察という言葉を広く認知活動全般に拡張すれば、観察者という言葉は、人間に限らず、何らかの認知機能をもつシステム全般について用いることができる。

以上を踏まえて、不寛容社会へのセカンド・オーダーの観察に立ち戻ると、不寛容社会を観察している観察者は「社会システム」であり、不寛容社会がどのように観察されているかという、まずは「寛容／不寛容」の区別を用いて観察されている、ということになる。さらに言えば、「不寛容社会は新しい現象として観察されている」、「不寛容社会は問題として観察されている」、「不寛容社会は感情的、攻撃的なものとして観察されている」、そして「不寛容社会は、何らかの興味をそそる(情報価値がある)対象として観察されている」といったことが挙げられるだろうか。

セカンド・オーダーの観察という視点を導入することの利点は、ファースト・オーダーの観察の水準では隠され、見えにくくなっていること(これを指して、比喩的に「盲点」と呼ばれる)が、はっきりと見えるようになることである。社会の不寛容さは、それが本当に新しいか新しくないかという議論を抜きにして、とにかく新しい現象とされており、そして「息苦しさ」や「萎縮」をもたらすものとして問題視されている。なぜ問題かという、それは感情的で、野蛮であるからだ。感情的、野蛮といった観察に用いられている区別の反対側には、理性的(合理的)、文明的、といった考えが隠されている。

まとめると、次のように言えるだろう。社会の不寛容さは、寛容／不寛容の区別を用いることで記述されており、その背後にあるのは、近代化・文明化した社会はもっと寛容であるべき(もっと「やさしく」あるべき)といった考え方である、と。

3 不寛容の拡大をどう捉えるか

3-1 文明化の過程

だがそもそも、近代化・文明化した社会は「やさしい」のだろうか。

文明化 (civilization) の定義については、ノルベルト・エリアスによる議論を参照する。エリアスによれば、文明化の過程は、内面の自己抑制 (self-restraint) の増大、および、社会の中の暴力の独占・寡占によって特徴づけられる (Elias 1969=[1978] 2010)。文明化が進めば、それまで当たり前のようにできていた・なされていたことが、だんだんできなく・なされなくなっていく。これは、イライラや息苦しさがなくなることを意味しない。繰り返しになるが、自己抑制の増大イコール文明化であると考えれば、イライラや息苦しさはむしろ強まることになる。社会の中の暴力も、なくなるわけではなく、いわば見えにくくされるだけで、どこかに形を変えて残る。日本に関して言えば、日本は治安がよく安全な社会だとされるが、それと引き換えに、不満やイライラ、攻撃性が、見えにくいところに偏在する (特定の場所に集中する) と言ってもいい。それはどこか。たとえば、学校におけるいじめ、近代家族における DV や児童虐待、「ブラック企業」、各種ハラスメントなど。あるいは、不寛容社会に関する一連の議論が指摘するように、インターネット。いずれにしても、社会学の伝統的知見を踏まえれば、社会の中の不寛容の増大は、文明化に対立するものではなくむしろ文明化の帰結として理解されうる。エリアスに限らず、同様のことは多くの論者によって指摘されている。不寛容の拡大は社会の分化の帰結でもあるし、消費社会化の帰結でもあるし、「モダニティの帰結」でもある。

3-2 不寛容社会のパラドックス

先ほど「不寛容社会は情報価値がある対象として観察されている」と述べた。誰かが、個人的に興味があるというだけでは「マスメディアを通じて」論じられることはない。不寛容社会というテーマは、情報価値があるからこそ、マスメディアに取り上げられる²⁾。少々込み入った議論になるが、不寛容社会が論じられるときにしばしば引き合いに出される、「保育園や公園の子どもの声がうるさい」、「公共の場でのベビーカーが邪魔だ」といった個々の言説それ自体には情報価値はない。だが『子どもの声がうるさい』とか『ベビーカーが邪魔だ』なんて狭量なことが盛んに言われるようになるなんて、息苦しい社会だよな」という、規範に照らした物言いへと加工された途端に、情報価値が生じ、マスメディアが取り上げるにふさわしい言説になる。

このように、マスメディアというファースト・オーダーの観察者 (=「社会システム」) が不寛容社会を観察するとき、不寛容は規範違反 (norm violation)、つまり逸脱 (deviation) として観察されている。そして不寛容社会が観察されているとき、この逸脱は解消されるべきものとして語られている。だがここで、マスメディアという観察者が「不寛容社会をどのように観察しているか」を観察してみよう。つまり、セカンド・オーダーの観察を試みよう。マスメディアがやろうとしているのは、不寛容という逸脱を解消することのように見えるが、そうではない。「不寛容な言説は逸脱だよな」、「こういう逸脱は解消されないといけないよね」という、より情報価値の高いメッセージを発信し続けることだ。その結果は、逸脱の解消ではなく増幅である。つまり、不寛容社会がマスメディアによって取り上げられる (観察される) というケースに関して言うと、そこでは、ファースト・オーダーの水準では逸脱の解消が主張されているが、セカンド・オー

ダーの水準で見ると、逸脱がどんどん増幅されるという結果がもたらされている。こういった状況を指して、不寛容社会のパラドックスと呼ぶことができるだろう。

すでに述べたように、本論文の関心は不寛容社会そのものにはない。本論文で目指しているのは、日本における不寛容社会という題材から、現代社会の示すパラドクシカルな様態を扱うための普遍的な社会学的認識枠組を導き出すことである。このことを踏まえて、引き続き考察を進めていこう。

4 社会の自己記述

4-1 不寛容に観察する社会

ここでは、不寛容社会にかかわる諸議論にみられる循環的構成を扱うために、自己記述という考え方を導入する。自己記述は、ニクラス・ルーマンの最晩年の大著『社会の社会』(Luhmann 1997=2009)の最終章(第5章)のタイトルにもなっており、ルーマンのライフワークである「社会の理論」(theory of society)の核心部となる考え方である³⁾。

自己記述とは、人々が自分自身について書くことではない。社会が、社会について記述することである。自己記述という用語を導入することの意義は、社会(という観察者)が循環的構成をもっていること(たとえば社会は社会の産物であること、社会は社会によって再生産されていること)を示すところにある。

不寛容社会も、社会(という観察者)による社会についての記述なので、自己記述の一例である。不寛容社会という自己記述は、規範違反、あるいは「社会の望ましさの追求」と密接に結びついているが、不寛容社会を語ることによって生み出されるのは不寛容の解消ではなく増幅である。つまり、語ることによって目指されているものとは逆のものもたらされている。なぜか。不寛容社会を自己記述として捉えることによって、不寛容社会が「観察されたもの」であると同時に、「観察するもの」であることがわかる。

不寛容社会が観察者であるというのは、つまり、ものごとを不寛容に頭の中で(心理的水準で)捉えることなく、不寛容に捉えられたものごとが公の場で語られる(社会的水準)ことを指す。社会の不寛容さについて語れば語るほど、不寛容社会は勢いを増すというわけだ。

ここで、よく言われていること、すなわち「不寛容社会は新しい存在なのかどうか」という点に目を向けてみよう。この点は一考に値する。というのも、不寛容さ、あるいは不寛容とみなせる現象ないし言説は、はるか以前から存在するし、日本に限って存在するものでもないからだ。だが不寛容社会という言葉に関して言えば、それはインターネットやSNSといったキーワードとともに語られている。ここが手がかりである。

先ほど述べたように、文明化は、それまで当たり前のようにできていた・なされていたことが、だんだんできなく・なされなくなっていくことである。これに対して、それまでほとんどできなかった、なされていなかったこと(非蓋然的なこと、生起する確率が低いこと)が、当たり前のようになれるようになっていく(蓋然的になる、生起する確率が高くなる)という、逆方向の変化がある。これは、ルーマンの用語法では社会の進化(evolution)であり⁴⁾、社会の進化を導くのは新しいコミュニケーション・メディア(たとえば、人類の歴史における文字、活版印刷、新聞、ラジオ、テレビ等々の出現)である。インターネットやSNSも新しいコミュニケー

ション・メディアであるから、これらが変化の決め手であると言えないこともない。だが不寛容社会は、SNS 等に見られる「些細なことに目くじらを立てる発言」が、規範違反という情報価値をもつものとして、テレビ・出版等の従来型マスメディアに取り上げられることなしには成立しない。不寛容社会は、従来型マスメディアとソーシャル・メディアのあいだの悪循環の関係によってもたらされたものであると考えれば、新しい存在と言えるだろう。

4-2 不寛容社会のパラドックスの応用

不寛容社会というパラドクシカルな存在に関する以上の考察から、どのような一般的含意を引き出せるだろうか。

まず言えることは、「望ましさの追求」「望ましくなさの解消」にかかわる用語（規範的判断や価値判断を含んだ用語）は、少なくとも、社会を記述するための社会学的認識枠組としては適切ではないということだ。もちろん、不寛容社会という言葉も、社会学の用語としては不適切である。社会という観察者の循環的構成を考慮に入れば、望ましさを求めれば求めるほど、望んだこととは逆の結果が出る可能性も無視できなくなる。望ましくない結果は、自己記述のポジティブ・フィードバックのメカニズムによってどんどん増幅されることになるかもしれない。

「望ましさの追求」「望ましくなさの解消」にかかわる用語とは言っても、一見してそれとわかるとは限らない。少子化や晩婚化・非婚化といった用語も、純粋に人口学な用語なのか、「子どもはもうけなければならない」「結婚はしなくてはならない」といった規範的なトーンを帯びた用語なのか、とっさにはわからない。だが前者と後者は厳しく区別されなければならないということは言えるだろう。そして、マスメディアや政治的標語等で価値判断を含んだ用語が用いられるときは要注意だ。息苦しさや窮屈さを論じることで、さらに社会を息苦しく窮屈にしていまいだろうか。

パラドックスが見出されるのは、何も不寛容社会というケースに限ったことではない。たとえば、以前から少子化の解消が叫ばれているが、もたらされているのは、結婚しにくい・産みにくい・育てにくいという逆の結果である。この種の事例は他にも見つけることができるだろう。

以上のように、不寛容社会という日本の事例から出発して、セカンド・オーダーの観察や自己記述といった社会学的認識枠組を適用することで、「望ましさの追求」という目的とは逆の結果がもたらされ、増幅される普遍的なメカニズムへと接近することができるのである。

5 おわりに

本論文では、日本の事例から出発して一般理論を探究するという課題を立てたので、「では社会の息苦しさ、窮屈さについてどのように対処できるのか？」といった実践的議論に関する問いには、十分に答えてこなかった。

「望ましさの追求」と密接に結びついた不寛容社会のような自己記述は、往々にして当初の目的に反する望ましくない帰結をもたらす。この種の問題に何らかの処方箋を出すとするれば、それはたとえば、つとにマートンが述べているように（Merton [1949] 1959=1961）、「意図せざる結果」を生み出す・見えにくくなっている悪循環の円環を発見し、制度的な手当てによってそのループを断ち切るべし、といった形になるだろう。

だが肝心なのは、悪循環という「盲点」を見出し、パラドックスの発生メカニズムを鮮やかに示すことができるかどうかともそうだが、仕組みがわかったとして、それにいかなる対策を施すことができるか、である。ただ、これに関しては悲観的展望を抱かざるを得ない。たとえば少子化や高齢化や、グローバル化や、さまざまな変化が生じることがはっきりしていて、そこからやがて何らかの問題が発生することが明らかであっても、社会という「観察者」は、規範に訴えるような記述ばかりして、何ら有効な対策を打ち出せていない(つまり「観察」が十分にできていない)。社会は社会の自己記述であると考えれば、社会は、自らがどういう「観察者」であるかという点に関して、いわばもっと「敏感」にならなければならない。

[付記]

本論文は、2017年7月21日にコロンビア共和国メデジン市の Pontifical Bolivarian University で行われた The 14th International Conference of Sociocybernetics における口頭発表 "Observing Intolerant Society: A Lesson from Japan's Experience" に基づいているが、日本語論文として公表するにあたって大幅に加筆・修正している。

[注]

- 1) 引用元：<https://www.nhk.or.jp/docudocu/program/46/2586816/index.html>, 2018年2月27日アクセス。
- 2) ここで展開した議論の基礎となっている理論枠組に関しては、Luhmann (1995=2005) を参照。
- 3) 自己記述という考え方の手短な解説については、赤堀 (2010) を参照のこと。
- 4) ルーマン『社会の社会』の第3章のタイトルは「進化」である (Luhmann 1997=2009)。

[文献]

- 赤堀三郎, 2010, 「社会学的システム理論における自己記述という構想」『社会・経済システム』31: 109-114.
- , 2016, 「社会の冷酷さについて——『社会システムの観察』を理解するために」『東京女子大学社会学年報』4: 1-12.
- Elias, Nobert, 1969, *Über den Prozess der Zivilisation*, Band 2, Bern: Francke Verlag. (= [1978] 2010, 波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳『文明化の過程』下巻 [改裝版], 法政大学出版局.)
- Luhmann, Niklas, 1995, *Die Realität der Massenmedien*, Opladen: Westdeutscher. (=2005, 林香里訳『マスメディアのリアリティ』木鐸社.)
- , 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会』, 法政大学出版局.)
- 真鍋厚, 2017, 『不寛容という不安』彩流社.
- Merton, Robert King, [1949] 1959, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, New York: The Free Press. (=1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)

森達也, 2017, 『不寛容な時代のポピュリズム』 青土社.

西田亮介, 2017, 『不寛容の本質——なぜ若者を理解できないのか, なぜ年長者を許せないのか』
経済界.

庄司興吉, 2016, 「序 今なぜ歴史認識と民主主義深化の社会学なのか？」 庄司興吉編『歴史認識と民主主義深化の社会学』 東信堂, 3-11.

谷本真由美, 2017, 『不寛容社会』 ワニブックス.

Observing Intolerant Society, Intolerantly Observing Society

AKAHORI, Saburo

Japan as a whole seems to have gained a reputation as a safe and secure place. However at the same time a tendency of increasing intolerance has been regarded as problematic in Japan. Recently such tendency has begun to be called under the expression “intolerant society”.

“Intolerant society” can be applied not only to Japan but also to the rest of the world. However, remarkably in Japan’s case both people’s kindness and intolerance are observed at the same time. It seems to be paradoxical.

The aim of this paper is to explore a better “general” framework to understand these paradoxical features of modernization and/or civilization through a case study of Japan. For this purpose we use the theory of “observing systems” as a clue. From this viewpoint, we submit some findings summarized as follows:

Firstly, sociologists had better distinguish between society itself and a society’s description of itself. What we have to focus on is the latter. Then we can understand that the intolerance of society is observed through using the distinction between tolerance and intolerance. Behind the distinction, an idea is hidden, that is: civilized society should be tolerant.

Secondly, from a sociological viewpoint, we should rather understand the rise of intolerance inside society as a consequence of the civilizing process itself.

Lastly, we can find the mechanism of this paradoxical consequence, such as how the pursuit of civilization tends to produce the reverse consequence. It relates to the description of society. For example, Japan is not so safe or secure because it is so well-civilized that irritations or frustrations are intensively concentrated in certain places, such as classrooms, workplaces, local communities and families, as a result of the encouragement of self-restraint.

We conclude that both a favorable and unfavorable description of society is not adequate as a sociological framework to observe society because it brings paradoxical images of society. Furthermore, unfavorable consequence would be amplified because of the positive feedback mechanism of societal self-description.

Keywords: second-order observation, civilizing process, self-description